条件表現に関する日韓対照一考察

名嶋義直

キーワード：条件形式の選択基準、非既定条件文、既定条件文、時間的関連性、意味的関連性

０．本稿の目的と考察方法

日本語学習者において、韓国語母語話者の占める割合は高く、日本語教育関係者にとって韓国語は関係の深い言語の一つであるが、日本語教育の観点からの文法体系における対照研究は決して多くない。そこで、本稿では条件表現における日本語と韓国語との対照考察を行ない、両言語の形式選択基準の相違について論じることとする。そして、韓国語母語話者が日本語の条件表現を学習する際に生じうる問題点を予測し、選択基準についての「説明」の方法について提言する。

考察は小説・随筆・日記等から収集した日本語の用例とそれに対応する韓国語の翻訳（韓国で出版されているもの）を比較することによって行なう。[1]

１．日本語の条件文

１．１．非既定条件文の中核的用法

日本語の条件文は複数の異なる形式で表現されるという特徴を持つが、前件の事態の性格に着目すると大きく２形式に分類できる。非既定条件文と既定条件文である。吉川武時(1989:208)、益岡隆志(1993:17)では非既定条件文におけるト・バ・タラ・ナラの典型的用法として次のような記述を行なっている。

[表１]

	吉川武時(1989:208)	益岡隆志(1993:17)
ト	恒常的な原理とか道理、または道順説明	現実に観察される偶起的な事態の表現
バ	条件らしい条件	一般的因果関係表現
タラ	ほぼ達成されることがらについて、それの成就を条件として示す	時空間に実現する個別的事態の表現
ナラ	相手の言ったことを受けて、それを条件として示す	ある事態を真であると仮定して提示する表現

これらから非既定条件文形式の選択に重要なのは前件に描かれるコトと後件に描かれるコトとの関係に対する話し手の認識、つまり意味的関連性の差異であることが明らかになる。この事実は、前件が非既定事態であることが上記４形式の使い分けにおける絶対的な選択基準とはならない、ということを意味する。

1．2．既定条件文における時間的関連性

既定条件文は現実世界に生起した２つの事態を時間軸に沿って描写するものであり、前件は後件に対し時間的に先行すればよく、後件に描かれる事態が生起したのが前件の事態完了後なのか、前件の事態完了前なのか、前件と後件が連続しているのか、といった両者間の時間的関連性を条件形式そのものでは区別しない。したがって、前件完了の(1)と前件未完了の(2)とを同一形式で表現できる。

(1) 先生は光子がどきっとするほど、素早い動作で首輪をつかむと、いつも止血剤注射する首のところへ針を刺し、なみなみと毒液を注ぎ込んだ。（動物）

(2) 汽車の通路の窓から外を見ていると、線路に子供が三人駆け込んできて、窓の下から絵葉書を振る。（犬）

2．日本語条件文の類型化

以下の８類型を本稿での考察対象類型とする。①から④が非既定条件文、⑤から⑦が既定条件文にあたる。類型化の分類基準として前田直子(1991)を用いた。その理由は、考察対象範囲が幅広く、分類が精密であると考えられるからである。

①反事実条件文：前件・後件ともに反事実を表わすもの。

②事態仮定条件文：前件・後件ともに未実現の事態を表わすもの。

③一般条件文（恒常条件文）：前件事態が成立すると、常に後件事態も成立するという二事態間の関係を述べるもの。

④習慣・反復条件文：過去の習慣・繰り返しを述べるもの。

⑤同一主格連続動作：同一主格の連続動作を描写するもの。事実的用法。

⑥コトの展開：前件事態の成立に連続する事態を後件で描写するもの。前件と後件は異主格。

⑦事態の発見：前件事態の成立直後に発見した事態を後件で描写するもの。

3．韓国語条件文の考察

3．1．非既定事態を表わすもの

本章では韓国語訳における接続形式の考察を行なう。日本語の用例を提示し、韓国語におけるト・バ・タラ・ナラに該当する接続表現のみIPA表記で示す。

①反事実仮定条件文

(3) わたしのほうもその気になれば、モルモットに与えてみることもできた。（友情）
ɯjɔɑ

(4) それがなかったら、僕らは一足も先に踏出すことができなかった。（報償）
ɯjɔɑ

②事態仮定条件文

(5) 繋いでくれなければ、警察に訴えますよ。 (動物)

mjɔn

(6) 普通にお使いになるなら、こんなのはお無駄でございますよ。(心づかい)

mjɔn

(7) しかし、照子さんがこの有様を知ったら、怒るだろうねえ。 (犬)

mjɔn

(8) はやく風邪なおして出てこないと、ほかのヤツとコンビ組んじまうぞ。

mjɔn (ミント)

③一般条件文（恒常条件文）

(9) 願望さえ強ければ、時間は向こうからやってくる。 (小遣い)

mjɔn

(10) 花鉢にあふれる花を見たら、だれでも一瞬心ひらけるだろうし－略－

mjɔn (同情心)

(11) 生水を飲むと下痢をするから、といわれて－略－ (エジプト)

mjɔn

④習慣・反復条件文

(12) 学校から帰ってくると、はっきりとした行き先と所要時間がわからなけ

mjɔn

れば、外出を許されなかった。 (蠅)

mjɔn

それぞれの類型で各形式の使用頻度に差異が存在したり、ある形式が使用されにくいという傾向はあるものの、非既定条件文であるこれらの条件文類型を、日本語においては基本的にはト・バ・タラ・ナラで表現することが可能である。また、文体的な意味特徴の差はあるものの、相互に置き換えが可能な場合も多い。

一方、韓国語では前件が既定事実でない非既定条件文の場合は通常、mjɔn が使用されることが用例の分析からわかる。①、②の前件は話し手によって仮定された仮定事態である。③、④は仮定事態というよりは時間性を持たない「概念」とでも言うべき性格を持つが、既定事実でないことには変わりない。したがって mjɔn が使用されることになる。

3．2．既定事態を表現するもの

非既定条件文における一形式の使用とは対照的に、既定条件文では複数形式が用いられる。考察に用いた用例に対応する韓国語訳では表２の７形式が使用されていた。具体的考察に先立ち、まず、各形式の意味について先行研究の記述をご

く簡単に概観する。これら先行研究の記述を見ると、前件と後件の時間的関連性に関する記述が中心となっていることが見てとれる。つまり、２事態の関係を表わす既定条件文では、２事態の時間的関連性が重要な意味を持つと考えられる。

［表２］

類型＼形式	ko	tɔni	taka	ni	tʃa	tʃani	nikka
⑤同一主格連続動作	○	◎	◎	●	◎		○
⑥コトの展開				○	●	○	○
⑦事態の発見				●	●		○

［凡例］ ●：使用頻度が相対的に非常に高い　◎：使用頻度が相対的に高い　○：使用頻度が相対的に低い

ko：「先行、原因・理由、様態、同時、並列」　鄭鉉淑(1996:5)、日本語のテ形相当表現に相当すると言える。

tɔni：「後に続く状況の前置きを表わす」　New ace韓日辞典(1994:557)

taga：「１つに主体に関する２つの事態を時間順的に展開する継起型」「〈仮定表現〉、〈先行中断〉、〈終了〉、〈契機条件〉」野間秀樹(1993:1-2)

ni：「先行文が後続の文に対する時間的状況を説明する」任瑚彬 他(1989:382)

tʃa：「先行動作が起こり同時に後続動作が継続される」任瑚彬 他(1989:390)

tʃani：「先行の文の動作をしようとするが後続の文が制約条件になる」任瑚彬 他(1989:391)

nikka：「原因・理由」五十嵐孔一(1997:20)、「時間的契機」任瑚彬 他(1989:133)

⑤同一主格連続動作

(13) あとは仕事師が土を一杯にすると、ならしてしまった。　(犬)
ko

(14) 先生は光子がどきっとするほど、素早い動作で首輪をつかむと、いつも
tɔni
止血剤注射する首のところへ針を刺し、なみなみと毒液を注ぎ込んだ。
(動物)

(15) 吊り革に下がったまま、車内を見回していると、私は驚いた。　(蝿)
　　ɾaga

(16) 滅茶苦茶に産むかかあのことを考えると、全くがっかりしてしまった。
　　ai　(セメント)

(17) 甲斐甲斐しく作業をすませると、「俺はねる。おやすみ」と上によじのぼってねてしまう。　(犬)
　　ɾʃa

(18) 家の中でじっとしていると、悲しさとはずかしさとで、胸が苦しくなってくる。　(ミント)
　　ɾikka

(13) はテ形相当表現が使用されている。日本語でも既定条件文で表現する事態を順次動作ととらえ、テ形で表現することが可能である。(14) では前件の完了後、後件事態が発生している。(15) では前件で描かれる動作の継続中に後件事態が発生している。(16) も (14) と同様、前件の完了後、後件事態が発生しているが、両者の違いは、ɾɔai がより完了性を強く持つ点であると考える。それは ɾɔ が「回想を表わす」機能を有する点[2] に起因すると考えられる。実際の用例でも ɾɔai には接続する述語が完了形態をとるものが幾例かあったが（タラに対応）、ai にはそのような例はなかった点からも ɾɔai の完了性の強さが実証される。(17) では前件事態の完了に連続して後件事態が生じたものと見なせる。(18) では原因・理由表現と同形の表現形式が用いられている。しかし、翻訳例からだけでは原因・理由表現として使われているのか、口語表現で多用される条件表現として用いられているのかが判断できない。ɾikka についてはその使用の指摘のみに留めたい。

ここまでの考察で日本語では同一形式で表現できる既定条件文表現が韓国語では複数形式で表現されることが明らかになった。それは日韓両語で各接続形式の選択基準が異なることを示唆する。具体的には、韓国語では前件と後件との時間的関連性が選択基準であり、それによって接続形式が区別されると考えられる。

⑥コトの展開

(19) 肩章、紺の制服の女税関吏が「グッドアフタヌーン」と言いながら入ってきて、ロシア語をしゃべりだす。主人と私は立ち上がって向かい合ったままキョトンとしていると、「クダモノ、ヤサイ、ハナノタネ、アリマスカ」と訊く。　(犬)
　　ɾjɔai

(20) 鎖を光子が持つと、ベルは歩き出した。　(動物)
　　ɾʃa

(21) 朝、お医者の家の縁側で新聞を読んでいると、私の傍に横坐りに坐って
lʃɑni
いた奥さんが、「ああ、うれしそうね」と小声でそっと囁いた。(満願)

(22) 「これはすぎなだな」と私が言うと、竹内さんは「そんなことない」と
nikkɑ
言う。 (犬)

(19)では「～しようとすると」という意味を持つrjɔni が使用されているが、これはniに準じて考えることができる。前件が「キョトン」とした結果の残存状態を表現しており、事態は完了していると言える。(20)では鎖を持った途端、犬が歩き出したという連続動作の描写である。(21)では前件で描かれる事態の継続中に後件事態が突然発生している。

以上、⑥「コトの展開」においても類型⑤同様、前件・後件の時間的関連性が形式の選択に重要な意味をもつことが明らかになった。

⑦事態の発見

(23) あるとき半円型のカウンターがある店でふと見ると、ミネラルウォーター
ni
の空瓶に水道の水を入れて持ってくるのが眼に入った。 (エジプト)

(24) タラップを下りると、冷たい風が吹いている。 (犬)
ni

(25) 二時半ごろ、ふと窓に眼をやると、陸地が見える。 (犬)
ni

(26) 見上げると、高い石の橋欄には、蔦蘿が半ば這いかかって、一略一
lʃɑ (尾生)

(27) ふと顔を上げると、すぐ眼のまえの小道を、簡単服を着た清潔な姿が、
lʃɑ
さっさと飛ぶようにして歩いていった。 (満願)

(28) 学校へ行ったら、私が一番、陽に焼けていた。 (ミント)
lɔni

ここまでの考察で、ni は前件の完了を意味し、lʃɑは前件と後件の連続を意味することが明らかになったが、この類型⑦ではni (lɔni含む) とlʃɑの両方が使用される。両者の違いを見てみると、lʃɑを用いる文では後件がすべて現象文である。一方、niを用いる文では(24)のように現象文の例もあるが、「見える」、「眼に入る」などの自発表現も存在する。(28)は学校へ行って皆と比べた後、「私が一番、陽に焼けていた」ことが分かったのである。明らかに前件は完了事態であり、前件と連続していない。また、(24)の「下りる」動作は事態の完了まで一定の時

間を要するものであり、「下りると」は事態の完了を含意することになる。

両形式の使い分けを考えると、時間的関連性の観点からは次のように考えられる。現象文が後接するlʃa では話し手の置かれた状況を認知とほぼ同時に描写していると考えることができる。したがって、前件・後件は時間的に分かちがたく連続している。一方、aiでは知覚した対象を話者の観点から捉え直している。そのため前件・後件間に一種の時間的空白が生じ、aiが選択されうるのである。

また、構文的観点からは次のように考えられる。この類型⑦は構文上、前件と後件の主格が異なるが、実際に後件事態を認知したのは前件の主格と同一である。つまり、類型⑦は類型⑤・⑥の特徴を併せ持ったものと考えることができる。そのためai・lʃa 両形式が使用可能であると考えられる。

4．既定条件表現各形式間の関係

4．1．時間的関連性モデル

既定条件文は現実世界に生起した２つのコトの関係を描くものである。時間軸に沿って生起する２つのコトの時間的関連は基本的に次の３タイプのいずれかに属すると考えられる。

(29) ２事象間の時間的関連性モデル

［完了関係］：前件と後件との間に時間的断絶がある関係

［連続関係］：前件と後件とが時間的断絶なく連続している関係

［重複関係］：前件事態の完了以前に後件が生起する時間的重複関係

諸形式の中で［完了関係］を表すのは ai 、［連続関係］を表わすのは lʃa、［重複関係］を表すのは lɔga・lʃaai である。それらは一種の相補的関係を示していると考えられる。［表１］が示すように、類型⑤（同一主格）においてはai の使用が多く、lʃa の使用はそれに比して少ないという傾向が見られる。一方、類型⑥（異主格）においては逆の傾向が観察されるからである。lɔga・lʃaai の関係については野間(1993:1)に、lɔgaは「基本的に前後の主体は同一だと考える」との記述がある。つまり、lɔgaとlʃaaiも同様の相補的関係にあると考えられる。

ここで問題となるのは類型⑤におけるlʃa の使用や類型⑥におけるaiの使用が反例となるのではないかという点である。しかし、次節に見るように、これらは逆に相補的関係存在の証左となりうるものである。

4．2．時間的関連性の認識

話し手における時間的長さの認識には厳格で絶対的な基準が存在するわけではない。それはある事態が完了直後であることを表す「～たばかり」という形式が幅広い時間的長さに適応することからも明らかである。

(30) 今、ご飯を食べたばかりです。

(31) 昨日、日本に来たばかりです。

(32) 2年前に結婚したばかりです。

したがって、2事態の展開を描写する既定条件文においても「完了」と「連続」の区別は話し手の主観的判断によるものと言える。そのため、同一類型内において両形式が併用されることはある意味で当然である。逆に言えば、複数の形式が同一類型において使用されるという事実は、話し手の時間的関連性における判断の違いを反映していることになり、相補的関係の存在の裏付けとなるものである。

傾向として言えば、2つのコトの「連続」は「同一主格」より「異主格」の場合に生じやすいと言える。行為者が異なるのであるから、前者に比べると、後者の方が2つのコトの連続が容易であると考えられるからである。

この相補的関係の存在は韓国語において前件・後件のより厳密な時間的関連性が形式選択要因として機能している一つの証左となると考えられる。

5．意味的関連性について

以上の考察から、韓国語の条件表現－特に既定条件文－において、前件・後件の時間的関連性が重要な意味を持つことが明らかになった。しかし、既定条件文で用いられる形式間には意味的な関連性の相違も存在する。[3)]

(33) お姉さんに相談したら、あんた、一生に友達二人だけでいいの？　っていわれた。　(ミント)
tɔni

(34) 先生は光子がどきっとするほど、素早い動作で首輪をつかむと、いつも止血剤注射する首のところへ針を刺し、なみなみと毒液を注ぎ込んだ。　(=1)
tɔni

(35) 暫く歩いていると、俺は変なものに出喰わした。　(桜)
tɔgɔ

(36) コピーして友達にくばったら、また、先生にしかられた。　(ミント)
tɔgɔ

上記用例は類型⑤に属するもので、共に同一主格の連続動作である。しかし、(33)・(34)と(35)・(36)とでは前件と後件との意味的な関連性に相違がある。前者に比して、後者では前件・後件間に意味的関連性、言い換えれば、必然性といった関係が認められにくいという特徴がある。(35)を例にとると、「暫く歩いてい」たコトと「変なものに出喰わした」コトとの間にはほとんど必然性がない。(36)にしてもそうである。「先生にしかられ」ることがあらかじめ予測できれば「コ

ピーして友達にくばった」りはしないであろう。次は類型⑥からの用例である。

(37) 主人と私は立ち上がって向かい合ったままキョトンとしていると、
rjɔni

「クダモノ、ヤサイ、ハナノタネ、アリマスカ」と訊く。 (=19)

(38) 汽車の通路の窓から外を見ていると、線路に子供が三人駆け込んできて、
tʃɑni

窓の下から絵葉書を振る。 (=2)

(39) 朝、お医者の家の縁側で新聞を読んでいると、私の傍に横座りに座って
tʃɑni

いた奥さんが、「ああ、うれしそうね」と小声でそっと囁いた。 (=21)

(37) はロシア人税関職員からロシア語で質問され、意味がわからず当惑していると、次に日本語で尋ねられたという場面である。前件・後件間には一種の必然性が認められる。それに対し、(38) では少なくとも話し手の意識・視点からは前件・後件間に何らかの必然性を見いだすのは困難である。(39) は3年ぶりに外出を医者に許可された患者が嬉しそうに歩いているのを見て医者の奥さんが「囁いた」という状況である。話し手が「新聞を読んでいる」コトと「奥さんが囁いた」コトとの間には何の意味的関連性も必然性も存在しない。

上の考察から、lɔni・rjɔni のような完了関係を表す形式とlɑgɑ・tʃɑni のような重複関係を表す形式とでは前件・後件の意味的関連性に違いがあることがわかる。前者は前件・後件の意味的関連性・必然性の存在を要求し、後者は前件・後件の意味的無関連性・偶然性・意外性を要求すると言える。

基本的に、類型⑤における代表形式ɑiは前者、類型⑥における代表形式tʃɑ は後者に属すると考えられる。前件・後件が同一主格の場合は前件・後件の意味的関連性や必然性が認めやすく、前件・後件が異主格の場合は意味的無関連性・偶然性・意外性が認めやすくなるからである。

以上、前件・後件間の意味的関連性と条件形式との関係を簡単に考察した。

6．結語－日本語教育の立場から－

本稿では複数形式で表現される日本語の条件表現が韓国語でどのように表現されるかを考察した。その結果、韓国語において、非既定条件文を表す場合には通常、 ɑjɔɑ が使用されること、既定条件文においては、単なる時間的前後関係を必要十分条件とする日本語とそれを厳格に峻別する韓国語とでは形式の選択基準が異なることが明らかになった。また韓国語における既定条件文においては、前件・後件間の意味的関連性も形式間で異なることが明らかになった。

したがって、韓国語母語話者は日本語の習得過程で、母語では行なわない区別・

選択を意識的に行うことを求められる場合や、意識的に行わないようにすることを求められる場合に直面することになる。これは非常に困難な状況である。

非既定条件表現習得にあたっては、導入時に形式選択基準についての意識づけが必要であると考える。条件節と帰結節とを時間的関連性ではなく意味的関連性の観点から関係づけるという「意識づけ」を持たせるようにすることが重要である。その「意識づけ」の方法として帰納的説明と演繹的説明とが考えられる。

前者の場合、それぞれの形式の持つ意味的関連性が確実に認識できる典型的な例文を提出しなければならない。ただし、学習者が韓国語の選択基準で考え、4形式とも nɨjɔ に対応するため混乱するおそれが存在する。この場合、学習者は自分が韓国語における選択基準で関連づけていることに気づいていないことも考えられる。このような場合は演繹的な説明が効果的である。この説明は可能な限り母語で行なったほうがよい。また、文法解説書の予習を前提とする場合でも可能な限り教師が確認した方がよい。我々が外国語の文法書を見たからといって全てが理解できるわけではないのと同様のことが日本語学習者にも言えるであろう。

既定条件文においても日韓では形式選択基準が異なるため習得上の困難が予想されるが、日本語の既定条件文ではト・タラが多用されるという傾向があり(前田1991:60)、4形式が使用される仮定条件文習得時ほどの混乱はないと考える。日本語では前件・後件を時間的前後関係だけで捉えていること、韓国語のようなより厳格な時間関連性の選択基準を持たないこと、トとタラ(タラについては一部制限あり)が多用されること等を説明すればよいと考える。

最後にテ形の使用について触れておく。韓国語のテ形相当表現は日本語のそれよりも使用範囲が広いため[4]、場合によっては許容度が著しく低下するからである。既定条件文には、意味は変わるものの、構文的にテ形との互換性があるものもあるが、不自然なテ形の使用には注意すべきである。以上が本稿の結論である。

註.

1) 本稿は第8回小出記念日本語教育研究会での口頭発表内容に加筆したものである。口頭発表の際、「用例の文体差を考慮すべきではないか」とのコメントをいただいた。その点について複数の韓国人留学生に質問紙調査を行ったところ、本稿で扱う接続形式については、文体差はその選択に大きくは影響しない、と考えられる回答結果を得た。したがって、文体差の存在は認めるが、本稿ではそれを捨象して考察を進めることとする。コメントをくださった先生方には記して感謝いたします。

2) 任瑚彬・洪曙杓・張淑仁(1989)p.371.にその記述がある。

3) この論考は名古屋大学大学院留学生、金恩暎氏の口頭による指摘に負う。

4）生越直樹(1987)に韓国語のテ形相当表現についての詳しい考察がある。それによると、koの用法は「並列・対比」、「継起・状況」となる。また、韓国語ではɑsɔ／ɔsɔという形式も日本語のテ形相当表現として用いられるが、この形式の場合、「（私は）友達が先生のところへ行ってみたらと言って来ました」が韓国語では適格性を有することを生越は指摘している。

参考文献.

五十嵐孔一(1997)「「原因・理由」：を表わす接続形“-(아／어)서”と“-(으)니까”について-韓国語の包括的記述を中心として-」『朝鮮学報』162 朝鮮学会 pp. 15-60.

任瑚彬・洪曄杓・張淑仁(1989)『外国人のための韓国語文法』延世大学校出版部.

生越直樹(1987) 「日本語の接続助詞「て」と朝鮮語の連結語尾{a}{ko}」『日本語教育』 62 日本語教育学会 pp. 91-104.

鄭鉉淑(1996) 「現代朝鮮語接続形Ⅲ-서 について－その意味と用法をめぐって－」 『朝鮮学報』161 朝鮮学会 pp. 1-93.

野間秀樹(1993) 「現代韓国語 接続形<-다가>에 對하여 －aspect・taxis・用語類－」『朝鮮学報』149 朝鮮学会 pp. 1-62.

黄燦鎬・李季順・張夾鎭・李吉鹿(1989)『韓日語対照分析』ソウル大学校語学研究所 明志出版社.

前田直子(1991) 「条件文分類の一考察」『日本語学科学報』13 東京外国語大学 pp. 55-79.

益岡隆志(1993) 「日本語の条件表現について」 益岡隆志編 『日本語の条件表現』くろしお出版 pp. 1-22.

吉川武時(1989) 『日本語文法入門』 アルク.

用例出典. 信念：武田泰淳「信念」、セメント：葉山嘉樹「セメント樽の中の手紙」、動物：大岡昇平「動物」、蠅：吉行淳之介「蠅」、尾生：芥川龍之介「尾 生の信」満願：太宰治「満願」、友情：星新一「友情の杯」、桜：梶井基次郎「桜の樹の下には」以上、『日本文学９日韓対訳文庫動物』Kim tʃoŋ lɔk 訳 (株)la rak uɔn 。犬：武田百合子「犬が星見た」、エジプト：色川武大「エジプトの水」、心づかい：河野多恵子「心づかい」、同情心：中村汀女「同情心について」、報償：金子光晴「報償を求めない心」、以上、『日本文学11日韓対訳文庫 日本の名随筆』l rak uɔn 出版部訳 (株)la rak uɔn 。ミント：『PEPPERMINT STORIES』p'jɔn tʃ'ɔl tʃu 訳 kɔ pak sɔn 。

（名古屋大学大学院）